



皆さん、「文化財レスキュー」という言葉は「文書レスキュー」という言葉には馴染みがないかもしれません。本日はこの二つについてお話します。私の所属する「書物の歴史と保存修復に関する研究会」、名前が長いので略して「書物研究会」とか「書物研」と普段は言っておりますが、その書物研の活動の柱の一つは19世紀以前の西洋古版本の修復です。例えば、表紙と本体が外れている本の場合、このように表紙と本体を繋いだりします。写真Ⅱ。新しい素材で綺麗に作り直すというのも一つのやり方でしょう。ですが書物研では、本がぐぐって直ってきた歴史を踏まえた「あるべき姿」を尊重しつつ、使えるように直すという方針をとっています。

本日は知恩院さんでの講演ですから、仏像でたとえてみましょう。仏像の修復でも、金箔が貼られた完成直後の状態に戻すことも、風雪に耐え歴史を刻んできた姿を受け継ぐように補修することもあります。これはお寺さまの考え次第で、どちらが正解というものではありません。ただ、書物研では刻んできた歴史を尊重するというやり方をとっています。

書物研では、このような修復作業以外に、修復の担い手を育成するための教室や、一般図書を修理するボランティア育成の講座なども手掛けています。

## ● 阪神淡路大震災以降、自然災害が相次ぎはじめた日本

## 講演

# 思い出をまもる、歴史をつなぐ ～文化財・文書レスキューの現場から

特定非営利活動法人・書物の歴史と保存修復に関する研究会  
講師・研究員

長友 馨

2025年10月11日に開かれたおつぎ文化講座での講演要旨を採録しました。



長友 馨 (ながとも かおる)

1970 (昭和45) 年、大阪府生まれ。1993年 (平成5) 年、大阪外国語大学外国語学部デンマーク語学科卒業。翻訳会社、IT 関連会社などに勤務後、ソフトウェア関連を主に扱う翻訳者として独立。2008 (平成20) 年、手持ちの洋古書が壊れていたことがきっかけで、書物研究会の教室を受講。同教室在籍中の2011 (平成23) 年に東日本大震災が発生し、文書レスキューを経験し翌2012年から書物研究会の講師ならびに文書レスキューの現場監督として活動中。また、2016 (平成28) 年からは通訳案内士 (現在の所属: 奈良県公認ツアーエキスパートの会) としても幅広く活動している。